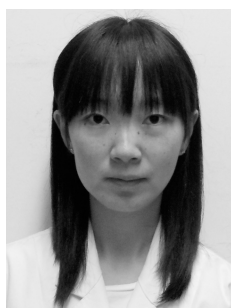


～新見賞～



王 飛霏

略 歴

昭和57年10月10日生

平成17年3月 富山大学工学部物質生命システム工学科卒業

平成17年4月 富山大学大学院理工学研究科修士課程入学

平成19年3月 富山大学大学院理工学研究科修士課程修了

平成19年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程入学

平成23年3月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科博士課程修了

平成23年4月 岡山大学大学院医歯薬学総合研究科細胞生理学分野
特別研究員

平成24年1月 高知大学医学部先端医療学推進センター
再生医療部門臍帯血幹細胞研究班 助教
現在に至る

研究論文内容要旨

パーキンソン病は中脳黒質ドパミンニューロンの選択的脱落を特徴とする神経変性疾患であり、振戦、筋固縮、寡動などの運動機能障害を生じる。現段階の治療法としては薬物療法や脳深部刺激療法が行われているが、根本的な治療法は未だ確立されていない。近年、パーキンソン病モデル動物に対して胚性幹細胞、神経幹・前駆細胞、胎児ドパミン細胞などを用いた細胞移植療法が行われ、良好な治療効果が報告されている。しかしながら、胚や胎児の細胞を用いるには供給量の不足と倫理面の問題があり一般的な治療法として普及させるのは困難である。一方、間葉系幹細胞 (Mesenchymal stem cell, MSC) は患者自身の骨髄より採取可能である上に培養が容易である利点を持つ。さらにMSCは骨、脂肪、心筋、神経などに分化し得る多能性幹細胞であり、種々の液性因子を分泌することが知られている。ケモカインであるSDF-1 α (Stromal cell-derived factor-1 α) もその中の一つである。SDF-1 α は本来遊走に関わるケモカインであるが、最近、新たな機能として脳虚血モデルに対する神経保護効果が報告されている。本研究では、このSDF-1 α に着目し、パーキンソン病モデルに対するMSC移植の治療効果について検討を行った。